

ぞくひやくだい かかく にっき み にほんじん  
続百代の過客 日記で見る日本人

そうせき にっき いぎりすじん たい かれ  
漱石の日記には、イギリス人に対する彼の  
かんじょう  
いらだちの感情がみなぎっている。

かれ くれいぐ いっかいごしりんぐ  
彼はW・J・クレイグから、一回五シリング  
はら えいご れっすん まいしゅうう  
払って、英語のレッスンを毎週受けていた。

こうねん しえいくすぴあがくしゃ  
後年になつては、このシェイクスピア学者  
かれ かんしゃ きも  
のことを、彼ももっと感謝の気持ちをこめ  
か たいえいになっき なか  
て書くようになるが、滞英日記の中には、  
たと つぎ きじゅつ み  
例えば次のようなあけすけな記述が見ら  
れる。

「<sup>に いたる る</sup> Craingニ <sup>ぶんしょう</sup>至ル。文 章ヲ <sup>を てんさく</sup>添削 (てんさく)

<sup>せ ん こと を いらい す</sup>セン事ヲ依頼ス。extra chargeヲ <sup>を ぼう む</sup>望ム。 <sup>いや</sup>卑

<sup>し き やつ な り</sup>シキ奴ナリ」。

<sup>かれ</sup>彼 が <sup>ろ ん ど ん</sup>ロンドンで <sup>げしゆく</sup>下宿 した <sup>いえ</sup>家 の <sup>しゅじん</sup>主人、

<sup>おんなしゅじん</sup>女主人などの <sup>じんぶつひょう</sup>人物評 をしても、 <sup>いっこう</sup>一向に

<sup>えんりょえしゃく</sup>遠慮会釈がない。

<sup>たと</sup>例え <sup>つぎ</sup>ば次のようである。「<sup>いえ</sup>家 の <sup>ものとも</sup>者共は <sup>いぬ</sup>犬の

<sup>きょうしんかい</sup>共進会を <sup>み</sup>見 に <sup>ぎょう</sup>行 た。 <sup>わる</sup>悪い <sup>てんき</sup>天気 <sup>で ゆき</sup>デ雪 が <sup>たかし</sup>降

<sup>い</sup>つて居る。 <sup>とうち</sup>当地のものは <sup>い</sup>天気を <sup>い</sup>気に <sup>い</sup>かけな  
い禽獣 (きんじゅう) に近い」

<sup>そうせき</sup>漱石は、 <sup>い ぎ り す じん</sup>イギリス人の <sup>じょせい</sup>女性に、 <sup>ちや</sup>お茶 ( <sup>て い</sup>ティ

一) に <sup>しょう</sup>招 <sup>とき</sup>ばれることが時にあった。

<sup>いえ</sup>家から <sup>とお</sup>遠く <sup>はな</sup>離れて、<sup>いきょうく</sup>異郷暮らしをしている

<sup>にほんじん</sup>日本人を、<sup>おも</sup>かわいそうに <sup>おも</sup>思っ <sup>おも</sup>てのことであ

ったが、あるいは <sup>きりす</sup>キリスト <sup>ときょう</sup>教に <sup>かいしゅう</sup>改宗させ

てやろう、という <sup>したごころ</sup>下心もあったのかもしれない。

ある <sup>ときかれ</sup>時彼は <sup>しょうたい</sup>そういう <sup>う</sup>招待を受ける。そし

て <sup>い</sup>言っている。「Mrs.Edghil <sup>より</sup>ヨリ <sup>の</sup>teaノ

<sup>あり</sup>invitationアリ。 <sup>ぎょうかねばならぬ</sup>行カネバナラヌ。 <sup>いや</sup>厭（いや） <sup>ダナー</sup>ダナー」。

また <sup>た</sup>他の <sup>ひ</sup>日、 <sup>だるう</sup>ダルウィッチ <sup>いっ</sup>の <sup>ち</sup>ある <sup>いえ</sup>家に <sup>まね</sup>招か

れた <sup>きじゅつ</sup>ことについて、 <sup>きじゅつ</sup>記述している。 <sup>ゆき</sup>雪が <sup>ひ</sup>ひ

どく<sup>ふ</sup>降る日<sup>ひ</sup>だったが、ことわるわけにはい  
 かない。や<sup>む</sup>つと向<sup>む</sup>こうへ着<sup>つ</sup>いたら、狭<sup>せま</sup>い  
 応<sup>おう</sup>接<sup>せつ</sup>間<sup>ま</sup>に通<sup>とお</sup>される。そこには、半<sup>はん</sup>ダース<sup>だ</sup>ス位<sup>す</sup>  
 の女性<sup>じょせい</sup>が、座<sup>すわ</sup>っている。明<sup>あき</sup>らかに彼<sup>かれ</sup>を待<sup>まち</sup>っ  
 ていたのだ。

「已<sup>い</sup>（や<sup>む</sup>）ヲ得<sup>とく</sup>ナイカラ腰<sup>こし</sup>ヲ据<sup>きよ</sup>エタ。右<sup>みぎ</sup>  
 ヲ見<sup>み</sup>テモ左<sup>ひだり</sup>ヲ見<sup>み</sup>テモ知<sup>ち</sup>ラナイ女<sup>おんな</sup>ダ。家<sup>いえ</sup>ノ  
 妻<sup>つま</sup>君<sup>きみ</sup>モ知<sup>ち</sup>ラナイ女<sup>め</sup>ダ。

外<sup>がい</sup>国<sup>こく</sup>人<sup>じん</sup>ノ然<sup>ぜん</sup>（しか）モ日<sup>も</sup>本<sup>にほん</sup>人<sup>じん</sup>ヲ一<sup>いち</sup>度<sup>ど</sup>モ逢<sup>あ</sup>  
 っ<sup>つ</sup>た<sup>た</sup>こ<sup>こ</sup>も<sup>も</sup>な<sup>ない</sup>の<sup>のに</sup>、`at home`,`にこ  
 ぶ<sup>ぶ</sup>な<sup>なん</sup>て<sup>て</sup>や<sup>や</sup>ぼ<sup>ぼ</sup>な<sup>な</sup>や<sup>や</sup>つ<sup>つ</sup>だ<sup>だ</sup>と<sup>と</sup>おも<sup>おも</sup>う<sup>う</sup>つ<sup>つ</sup>た<sup>た</sup>が<sup>が</sup>しか<sup>しか</sup>た<sup>た</sup>  
 ぶ<sup>ぶ</sup>ナ<sup>ナ</sup>ン<sup>ン</sup>テ<sup>テ</sup>野<sup>や</sup>暮<sup>ぼ</sup>ナ<sup>ナ</sup>奴<sup>やつ</sup>ダ<sup>ダ</sup>ト<sup>ト</sup>思<sup>おも</sup>ッ<sup>ッ</sup>タ<sup>タ</sup>ガ<sup>ガ</sup>仕<sup>し</sup>方<sup>は</sup>  
 が<sup>が</sup>な<sup>な</sup>く<sup>く</sup>む<sup>む</sup>か<sup>かい</sup>い<sup>い</sup>も<sup>も</sup>ぎ<sup>ぎ</sup>り<sup>り</sup>で<sup>で</sup>こ<sup>こ</sup>ん<sup>ん</sup>だ<sup>だ</sup>ん<sup>ん</sup>だ<sup>だ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>こ<sup>こ</sup>ち<sup>ち</sup>ら<sup>ら</sup>  
 ガ<sup>ガ</sup>ナ<sup>ナ</sup>ク、向<sup>む</sup>モ義<sup>ぎ</sup>理<sup>り</sup>デ呼<sup>よ</sup>ン<sup>ン</sup>ダ<sup>ダ</sup>ン<sup>ン</sup>ダ<sup>ダ</sup>ラ<sup>ラ</sup>ウ、此<sup>こ</sup>方<sup>ち</sup>

もぎりでぎょうつたのだ  
モ義理デ行ツタノダ。

ちやがでる きまりきつたことをじそうげんごはなしす  
茶ガ出ル。キマリキツタ事ヲ二三言語話ス

ちゅうりやく ぜんく じかん つぶしだ せいようのしゃかい  
(中略) 全ク時間ツブシダ。西洋ノ社会

はぐなものだ こんなきゅうくつなしゃかいを いったい  
ハ愚ナ物ダ。コンナ窮屈ナ社会ヲ、一体

だれがさくつたのだ なにがおもしろい  
ダレガ作ツタノダ。何ガ面白イ」

いぎりす なが じぶん  
イギリスに長くいればいるほど、自分と

いぎりすじん けんかく そうせき おお  
イギリス人との懸隔を、漱石はより大きく

かん (くさまくら) なか ひょうげん  
感じる。いずれ『草枕』の中に表現され

いけん よげん  
ることになる意見を、すでに予言するよう  
な形で、彼はこう書いている。

せいようじん は もりのう いことがすきだ  
「西洋人ハ執濃 (しつこ) イ事ガスキダ。

かれないことがすきだ げいきよを かんてもぶんる  
華麗ナ事ガスキダ。芸居ヲ観テモ分ル。

ふうふかん の せつぷん や かかえ き ごう  
 夫婦間ノ接吻ヤ 抱キ合ウノヲ見テモ分ル。  
 是ガ皆文学ニ返照シテ居ル故ニ洒落（しゃ  
 ちようだつ の おもむき に ぼう し い  
 らく）超脱ノ趣ニ乏シイ」

そうせき にっき なか せいようてきしゅみ  
 漱石 は 日記 の 中 で 、 西洋的趣味 と  
 にほんてきしゅみ ひかくたいしょう つね  
 日本的趣味を絶えず比較対照して、常に  
 にほんてき ぐんき  
 日本的なもののほうに軍記をあげている。  
 かれ ぜんめんてき かくしん  
 といって彼は、それを全面的に確信してい  
 たわけではなかったはずである。もしそう  
 かれ ただ せいようぶんがく けんきゅう  
 ならば、彼は直ちに西洋文学の研究に  
 み き はいく かんし そうさく せんねん  
 見切りをつけ、俳句や漢詩の創作に専念し  
 たにちがいないからだ。

にほんじん せいよう  
 日本人が、西洋のものならどんなものでも  
 むひはん と い はんたい  
 無批判に取り入れることに反対はしてい

でも、日本にほんにおける西洋化せいようかの過程かていは、まだ  
不十分ふじゅうぶんだと彼はかれ考かんがえていた。

彼は書かいている。「日本にほんハ三十年前さんじゅうねんまえニ 覚さとる  
め た と う ん ふ ぜん れ ど も は ん し ょ う の こ え に き ゅ う に と び  
メ タ ト 云 フ。然レドモ半 鐘 ノ 声 ニ 急 ニ 飛  
び お こ し き た る な り そのさとる め た る は ほんとう  
ビ 起 キ タ ル ナ リ。其 覚 メ タ ル ハ 本 当 ノ 覚  
メ タ ル ニ ア ラ ズ。

狼 狽 ( ろ う ば い ) し つ ぐ り か え し あ る な り  
狼 狽 ( ろ う ば い ) し つ ぐ り か え し あ る な り

ただせいよう か ら き ゅ う し ゅ う す る に き ゅ う し て し ょ う か  
只 西 洋 カ ラ 吸 収 ス ル ニ 急 シ テ 消 化  
す る に ひ ま な き な り ぶ ん が く も せ い じ も し ょ う ぎ ょ う も  
ス ル ニ 暇 ナ キ ナ リ。文 学 モ 政 治 モ 商 業 モ

みなぜん ら ん に ほん は  
皆 然 ラ ン。日 本 ハ 真 ニ 目 ガ 醒 ( さ め ) ネ バ  
ダ メ ダ」

ぶ ん ま つ だ め だ こ う ご た い つ よ ひ び  
文 末 の 「 ダ メ ダ 」 と い う 口 語 体 の 強 い 響 き

なか そうせき かくしん つよ  
 の中に、漱石の確信の強さがこめられている。

かれ にほん さとる め よ とき は  
 彼が日本に「覚メヨ」という時、果たしてなにを意味しているかは、はっきりわからない。

にっき のこ ぶぶん お はか  
 しかし、日記の残りの部分から推し測って、  
 そうせき どうじわすら ゆううつしょう  
 漱石が当時患っていたひどい憂鬱症を、  
 なにもの なお  
 何物といえども治せなかっただろう、とい  
 たし  
 うことは確かである。

めいじさんじゅうねん いちきゅうまるひととせ しちがつついたち かれ  
 明治三十年（一九〇一年）七月一日、彼は  
 にっき か ちかごろひじょう に  
 日記にこう書いている。「近頃非常ニ

ふゆかいなり。くだらぬことがきにかくりかえしる  
不愉快ナリ。クダラヌ事ガ気ニカゝル。

しんけいびょうかと  
神経病カト怪（あやし）マル」。

ゆううつしょう  
憂鬱症のおかげで、そうせきせっかく  
漱石は折角の

いぎりすせいかつまったたの  
イギリス生活が全く楽しめなかった。し

わたし  
かし私たちは、このゆううつしょう  
憂鬱症がなかったな

らば、そうせきこうねんけっさく  
漱石後年の傑作は、あるいは

そうぞうでき  
創造出来なかったかもしれないことを、わす

れてはならないのである。